

東方違想文

まろぼし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは親に捨てられ、親戚にも捨てられ、人間としても捨てられた者が能力を持ち幻想郷で羽ばたく文章

目次

0章 暗転、そして幻想の幕開け

プロローグ、そして暗転 |

1

0章 暗転、そして幻想の幕開け

プロローグ、そして暗転

——薄暗い部屋にアラームが鳴り響いた。

やかましい音のなるスマホを手に取りアラームを止めた。

頭と体はもつと睡眠を欲していたが目を覚ますべくノロノロと洗面台へと向かった。

寝ぼけながら洗面台の鏡の前へ立つと、寝癖ばかりのいつもと変わらぬ自分の顔があった。

しかし、右の頬が腫れてるように見えた。

(・・・やつぱり腫れてたかあ、どうりで痛いわけだ)

よくよくみると目の下まで腫れていたり、頬に切り傷があったりした。

お湯を使うのもめんどくさいと思い、水を張り傷だらけの顔におもいつきりかけた。
「いつってえええ!!」

やはり痛かった。

・・・そりゃあんな傷に冷水使えばなあ、

しかし目覚ましにはなったからよしとしよう。痛かったけど。

一応エナジードリンクも飲んでおこう。

そう思ってキッチンに向かった矢先に

「ピンポーン」

と軽快なドアベルがなった。

だれが来たんだ、と疑問に思っている

『宅配便です。』

とやや間抜けな声が聞こえた。

はて・・・？何か頼んだっけか？

そう疑問に思いながら一応財布とハンコを持って玄関に向かった。

「ピンポーン」

もう一回ドアベルが聞こえたので

「今いきます!!」

と急いでドアを開けた。

「シロイヌ宅配のものですー、***さんですかー？」

「あー、はい」

「お届けものがとどいてます。ハンコとサインもらってもいいですかー」

宅配会社の人もめっちゃ眠そうだった。

やっぱりみんな朝無理なんだな、そんな事を思いながら手早くサインとハンコを済ませる。

「ありがとうございますー」

(最後まで気が抜けるなあ)

「あ、そいえば」

シロイヌの人が振り返る。

「もうひとつ、届けるものがあつたんだつた。」

ここであの人はバックから黒い物体を取り出した。

「あなたの死です。」

鋭い眼差しと禍々しく黒い物体・・・拳銃を俺に向けて

(あ・・・やべ・・・逃げな)

パァン!

俺の頭に、

パァン!!

体に、打ち込んだ。

俺はそのまま前のめりに倒れこんだ。

なんとか這いつくばってでも逃げようとしたが何発も撃ち込まれたせいか、体が動か

なかった。

流血量が凄いで、寒い。震えが止まらない。

「アハハハハハハハハハハ!! 死ねえ!!」

死ね!! 死ねえ!! バハハハハハハハハハハッ!!!」

さつきまでの眠そうだった宅配の人とはまるで別人のような狂人ぎみ笑い声が脳裏にこべりついたまま

俺の意識は暗転していった。

うつすらと誰かの叫び声やサイレンの音が聞こえたが、気にかける間もない中完全に意識が途切れていった。

そんなんでいいのかよ・・・
なあ、

世界からあぶれてこの世界が誰よりも嫌いな

ゴミがよ